内陸アラスカにおけるサケ漁撈・管理史と現代的課題

科学人類学と狩猟採集民研究のはざまで

近藤祉秋（北海道大学）

本発表では、内陸アラスカ・クスコクィム川上流域におけるサケ漁撈・管理の技術史をひもときながら、漁撈対象種の減少と「伝統文化」の次世代への継承という 2 つの現代的課題に対して、現地の人々がどのように対応しているかを民族誌として描き出すことを目的としている。とりわけ、本発表で焦点を当てるのは、サーモンリバーと呼ばれるディチナニク人によるマスノスケ漁撈の拠点とも言える場所であり、その場所を誰がどのように利用できるかについての交渉が描かれる。

ユーコン川流域のサケ管理を調査した井上敏昭（2008: 61-66）によれば、中流域で生存漁撈をおこなうグィッチン社会は、みずからとは異なるパラダイムでサケを理解する自然資源管理行政との対立、サケを商業漁業の対象としてきた下流域の社会との対立、国際河川であるユーコン川におけるアメリカ合衆国とカナダの対立という３つの大きな課題に直面していることを指摘した。

井上の議論は、グィッチン人のサケ漁撈や分配に関する調査に基づきながら、流域内のサケ管理に関する分析では共時的な集団間の交渉と連帯の構築に焦点が当てられている（井上 2008; 2015）。流域面積 80 万平方キロメートルを超える国際河川のユーコン川を分析の対象とする上で、このようなアプローチは有効であると考えられる。

他方で、クスコクィム川は、その流域に複数の先住民社会が居住する点ではユーコン川と共通するものの、流域はアラスカ州内に留まっている。井上が指摘するような資源管理行政や下流域との対立関係はクスコクィム川においても存在しており、本発表でも議論の対象としていくが、現地調査で得られたデータはその状況を理解するためにはより時間軸を意識した分析が必要であることを示唆している。本発表では、サーモンリバーを中心としたクスコクィム川上流域を主な舞台として、サケ漁撈と管理における技術的な変化について通時的な垂直軸の分析を試みる。

本発表の内容を一言で表すならば、「誰／何がサケが遡上する川をせきとめる権利を有するのか」をめぐるポリティクスの熾烈さとそれがもたらす予測不可能な動きを示すものであったと言える。地域外の資本家による収奪的な漁業に対する漁民たちの闘いがクスコクィム川上流域では生存漁業に対する不当な抑圧をもたらし、それがめぐりめぐって、「白人のやり方」とも言われてきた釣竿でマスノスケを釣るキャンが「文化キャンプ」となる。コロンビア川では資本家の収奪的漁業を支えた捕魚車は、今ではアラスカ先住民の「文化」として積極的に推進されてさえいる。漁業管理学者の視点から見れば、アラスカ先住民の人々はビーバーダムや倒木を撤去することで環境破壊を招いた 20 世紀前半の「河川改善」事業の信奉者に見える。

下流域の住人、国外の商業漁業者などがサケ漁業に関与している状況で、上流域の社会単独の努力で問題解決を図ることは到底不可能に近い（cf. 井上 2008: 66）。本発表では、河川湖沼の水位減少とビーバーの増加が組み合わさった魚類の遡上阻害という新しいサケ減少の要因を指摘する。これはさらに問題を複雑にする。気候変動はそもそも全球規模の出来事であるし、毛皮交易時代に絶滅しかけたビーバーは温暖化するアラスカ北西部で生息域を広げつつある（Tape et al. 2018）。ポリティクスは、多様な人間のアクター間の政治的な駆け引きだけでなく、激変する自然環境における人間とビーバーの間の協働と対立という側面も持ち始めた。気候変動の影響研究という観点からは、生態系エンジニア種の生息分布が変化することにともなう陸域生態系のランドスケープ規模の変化が加速する仕組みを考慮する必要が生じたとも言えるだろう。

合意形成が容易に進まない中で先住民社会の自助努力は進んで行っている。野口泰弥によれば、カナダ・ユーコン準州のペリー・クロッシングでは、子どもへの教育のために漁撈キャンプを活用する取り組みにまつわる出版物の中で、祖先からの教えが気候変動という新しい課題に対処する上でも重要であると述べられている（野口 私信）。例えば、サケが減少している現状では、ウサギやライチョウのような小型鳥獣の狩猟を増やして別の食料源を確保したり、川の障害物を取り除いて遡上するサケを助けたりすることが必要であるとされる。

漁撈キャンプは、コミュニティレベルでの気候変動に対する適応策が試行錯誤のうちに組み上がる場であるとも言える。他方でアラスカでは、TCC が健康増進プログラムの一環として「文化キャンプ」を推進しており、その一環としてニコライ村では、ビーバーの罠猟を学ぶキャンプが開かれた。これは、ニコライ村の人々がビーバー捕獲数の減少がサケ減少につながっていると考えていることを踏まえると、自分たちの力で問題を少しでも解決しようとする姿勢の表明であるとも取れる。

キーワード：マルチスピーシーズ人類学、野生生物管理、漁具、ポリティクス、「文化」